

プロジェクト特集にあたって

高 木 裕

今回、紀要に人文学部研究プロジェクト「声とテキスト論」の特集を組むにあたって、この特集の趣旨について、一言ふれておきたい。〈声〉については、昨今、一種の流行であろうか、この言葉をタイトルに掲げた書籍が書店にうずたかく積まれている光景を目撃する。どうも言葉と身体の関係を〈声〉を通してもう一度見直してみようということのようであり、いわば〈声〉の復権と言えるだろう。ところで、言葉でもなく、歌でもなく、それが〈声〉であるというところに注目すると、〈声〉は、きわめて起源的なものだと気がつく。つまり、言葉なき、言葉にならない〈声〉もあるし、歌ではないが、とてつもなく美しい〈声〉もある。人間の身体、声帯の震えから、声は生まれ出る。この身体的、物理的、起源的な〈声〉から、テキストのレクチュール（読解・朗読）の中で、認識される〈声〉、あるいはそこで〈喩〉として機能している〈声〉に至るまで、〈声〉の定義はさまざまである。プロジェクト「声とテキスト論」は、この〈声〉の諸相にさまざまな角度から（文学、哲学、文献学、表象文化論、メディア論等々、……）アプローチし、音声言語と書記言語、口承とエクリチュール、テキストの生成、解説、役割機能、形態、受容等々の問題を深め、新たな人文学の構築を目指すものである。

構造主義の「テキスト論」においては、——例えばレヴィ・ストロースとローマン・ヤーコブソンによるボードレルの「猫たち」のテキスト分析はその象徴としてたびたび引用されるが——、テキストの均衡の取れた構造、言語自体の自律性を分析によって検証し、そこでテキストの「作者」からの自立性を明快に示し、テキストは実証研究の呪縛から解放されたかに見えた。実際、マラルメやネルヴァルの詩の構造分析はテキスト構造の自律性とテキストの美学との関係を見事に浮き彫りにした。しかし、テキストのこの「解体作業」が一

段落すると、テキストがまさに〈声〉を失った記号の配列と化し、〈生〉の痕跡を留めていないことに気づくことになる。こうして、「作家・詩人」は大いなる復活を遂げ、「テキスト生成論」において、その聖なる草稿断片は克明な研究対象となった。テキスト論も死んだわけではない。この「作者」の復権とは別に、記号論的アプローチにとらわれることなく、近年さまざまなアプローチ、分析の試みが現れている。その一つに〈声〉をキーワードにしたテキスト研究がある。フランスのドミニク・ラバテの『声の詩学』（1999）などはその成果の一端を示している。私はフランスの文学研究誌 *Romantisme* に掲載した論文 *La voix de la poésie nervalienne* において、詩のテキストとそこで生成する〈声〉について考究した。私にとって、テキスト論と〈声〉の問題は、テキストにおける「主体」とは何かという問題と密接にかかわり、*lecture*（読解＝朗読）のレベルにおける〈声〉の生成をテキスト論の構築あるいは新たなテキスト分析の方法の可能性を模索している。今回の特集に掲載する私の論文「ボードレールの「七人の老人」について ― 詩の主体に関する一試論 ―」は、これまで語りの散文性の特徴、一人称〈私〉の語り手の演出方法、隠喩としての〈都市〉、重層的なイメージ構造などさまざまな角度から分析されてきた『悪の華』の一詩篇について、「詩の主体」とは何かという角度から、語り手のみに焦点化するのではなく、詩の構造全体からこの「語り」の声の特徴を再考察すべきであることを論じた論文である。

村上論文「デカルトの身体論」は、*cogito ergo sum* を主張するだけがデカルト学説ではないとし、彼に身体論という角度から迫った研究であり、その身体感覚がどのように精神に伝えられ、理性といかに関わるかに光を当てた他の二つの認識論を探っている。この角度から、デカルトの「身体論」を考察することは、テキストにおける身体、身体性を根源的に捉え直す意味でも重要である。

鈴木論文「平家物語における郢曲とそのテキスト」は主に「朗詠」を取り上げ、『平家物語』（書物／伝本の相における）の「朗詠」の取り入れ方を調査検討し、〈平家物語〉（演誦の相における）の演誦（特にその曲節）といかに関わって「形」が定まったのかを、検証している。様々な口頭機能（語る、歌う、

読む、唱える、話す…)を統合して成立した平家物語の演誦は、その当時の音楽も摂取しつつ出来あがったものと推定され、その音楽は、文学的な形態と切り離せないものが多く、論文は「朗詠」に焦点を充て、音楽（一声）がテキストの形にいかに関わり、いかにテキスト化されたかを実証的に示し、声の文化を具体的に検討したものといえる。

今回の特集では、〈テキスト〉における〈身体〉、〈テキスト〉における〈声〉という問題に取り組む形になったが、「声とテキスト論」と一言で言っても、実に多様なアプローチ、方法論、テーマが存在している。この特集ではほんの一端を示したにすぎないが、「声とテキスト論」プロジェクトに多少とでも関心を持って頂く契機になればと願っている。